

第79回 憲法を考える映画の会

映画 〇月〇日、区長になる女。

手元資料

- 日時：2025年1月12日（日）
13：30～16：30
- 会場：文京区民センター 3A会議室
- プログラム

13：30～13：40 この映画について
 13：40～15：30 『映画〇月〇日、区長になる女。』上映（110分）
 15：40～16：10 内田聖子さんのお話
 16：10～16：30 トークシェア

第79回 憲法を考える映画の会
映画 〇月〇日、区長になる女。

2025年1月12日（日）
 13時30分～16時30分
 文京区民センター 3A会議室
 (地下鉄 春日駅 2分・後楽園駅 5分)

■プログラム
 13：30～13：40 この映画について
 13：40～15：30 『映画 〇月〇日、区長になる女。』上映（110分）
 15：40～16：30 トークシェア

■観覧料：一般 1000円 若者 無料
 (高齢者の方もお気軽にお問い合わせください。予約不要で、どなたでも参加できます。)

『映画 〇月〇日、区長になる女。』
 2024年制作/110分/ベヤンヌマキ監督/ドキュメンタリー映画
 原作・監修・演出・脚本/映画 〇月〇日、区長になる女。製作委員会



『映画 〇月〇日、区長になる女。』
 人口57万人、約47万人という規模の区長選にも関わらず、わずか187票差で決着した2022年 杉並区長選挙。この選挙に立候補し、選挙を賭した杉並区民と選挙を賭した杉並区民に密着したドキュメンタリー『映画 〇月〇日、区長になる女。』

監督は杉並区在住の作家・演出家ベヤンヌマキ。彼女が長年住むアパートが再開発計画により立ち退きの危険にあることを知り、止める方法を自身で調べ始めるのが本作のきっかけです。

選挙自身が選挙の当事者となり、今まで無縁の世界だった選挙、政治の世界へカメラ片手に飛び込み、住民たちと密着し、学びの場でもあり、それ以上に選挙と選挙民たちと密着し、先づきながら、選挙民のため選挙を密着していくリアルなやり取りが多く記録されています。

「この選挙で何が起ったのか?」「住民選挙とは?」「政治とは?」「そもそも公共とは?」

本作の監督は、杉並区民が作った応援歌『ミニシバリズム』を、監督陣（上記岸本聡子と岸本聡子）がカバーした『選挙民のミニシバリズム』、『ミニシバリズム』とは、選挙に参じた自治体的な民主主義や選挙民を重視する考え方で、本作の主題歌となりました。

そして選挙に参じた選挙民に、新たな形を結びます。私たちの生活は、政治と繋がっている、もう離れてはいられない。〇月〇日、次はあなたかもしれない。

【監督 ベヤンヌマキ コメント】
 「こんにちは、杉並区に住んで20年になるベヤンヌマキです。私が住んでいる閑静な住宅街に大きな選挙場を築く計画があることを知りました。計画が進むと私の家は立ち退きになってしまいます。自分のことと一緒に住んでいる街のことなんて考えたこともありません。自分自身が住まれている街に選挙して初めて、政治や選挙が私たちの生活につながっていることに気づきました。そして・・・カメラを担ぎ始めました。選挙場を少しでも上げるために、本日は、観たままの記録を取り、お気に入りの川沿いを散歩してパロディ動画を撮影しだしていったらいいかなんて思っていました。ただ撮影していたら、この生活が奪われてしまう、もう戻らないからいい!これは絶対に記録しておく必要があり、杉並区で起きていることであり、どこにも逃げていられないこと。」
 (『映画 〇月〇日、区長になる女。』公式サイトより)

憲法を考える映画の会
 〒185-0024 東京都国分寺市泉町3-5-6-303
 mail: hanasaki33@me.com
 TEL:042-406-0502 http://kenpou-eiga.com/

■手元資料 目次

- 資料① 『映画〇月〇日、区長になる女。』について P.2
- 資料② 『映画〇月〇日、区長になる女。』監督インタビュー P.3～P.5
- 資料③ 統一地方選とミニシバリズム 巻き起こる新リベラル旋風〈中嶋岳志〉 P.6
- 資料④ 岸本聡子著『杉並は止まらない』案内 P.6
- 資料⑤ 『映画〇月〇日、区長になる女。』を見て 感想文 P.7
- 資料⑥ 『映画〇月〇日、区長になる女。』自主上映のご案内 P.7
- 資料⑦ 本日のトーク・シェア資料について P.8
- 資料⑧ 選挙・参政権について考える映画・映像 P.9
- 資料⑨ 市民運動について考える映画・映像 P.10
- 資料⑩ 第78回憲法を考える映画の会『琉球弧を戦場にするな』報告 P.11～12
- 憲法を考える映画の会 あとおいニュース 第48号 2025年1月10日 P.12

- 〈別冊資料①〉対話と住民参加の自治体づくり—杉並区の経験から—
- 〈別冊資料②〉地べたからの民主主義を 地域からの修復
- 〈別冊資料③〉「杉並区長 岸本聡子 区政報告」2024年夏号（2024年7月10日発行）
- 〈別冊資料④〉「地域主権でコモンの再生を LIN-NETとは?」
- 〈別冊資料⑤〉「杉並区長 岸本聡子 後援会」SOCIAL SATOKOS (*以上別冊資料は、岸本聡子事務所 提供)

憲法を考える映画の会



〒185-0024
 東京都国分寺市泉町3-5-6-303
 TEL & FAX : 042-406-0502
 ホームページ : <http://kenpou-eiga.com/>
 E-mail : hanasaki33@me.com

資料① 『映画〇月〇日、区長になる女。』について

【内容紹介】

人口57万人、有権者数47万人という規模の区長選にも関わらず、わずか187票差で決着した2022年 杉並区長選挙。この選挙に立候補し現職を破った岸本聡子と彼女を草の根で支えた住民たちに密着したドキュメンタリー『映画 〇月〇日、区長になる女。』（エイガ マルガツマルニチ クチョウニナルオンナ）

監督は杉並区在住の劇作家・演出家ペヤンヌマキ。彼女が長年住むアパートが道路拡張計画により立ち退きの危機にあることを知り、止める方法を自身で調べ動き始めたのが本作制作のきっかけです。

監督自身が地域問題の当事者となり、今まで無縁の世界だった選挙、政治の世界へカメラ片手に飛び込み、住民たちと連携し、学び悩む記録でもあり、それ以上に候補者と支援者たちと悩み考えつつかりながら、合意形成のため対話を積み重ねていくリアルなやり取りが数多く記録されています。「この選挙方法で良いのか?」「住民要求とは?」「政策とは?」「そもそも公共とは?」

本作主題歌は、杉並区民が作った応援歌『ミュニシバリズム』を、黒猫同盟（上田ケンジと小泉今日子）がカバーした『黒猫同盟のミュニシバリズム』。「ミュニシバリズム」とは、地域に根付いた自治的な民主主義や合意形成を重視する考え方で、本作の重要なテーマとなっています。

そして選挙後に起こった動きに、新たな光を感じます。私たちの生活は、政治と繋がっている、もう黙ってられない。ジャーナリズムとはちょっと違う、未来への希望に満ちた新しい市民映画が誕生しました。

〇月〇日、次はあなたかもしれない。

《イントロダクション》

東京都杉並区。57万人が暮らす緑豊かな街で、行政主導の再開発、道路拡張、施設再編計画が進んでいた。そんな状況のなか迎えた2022年6月の杉並区長選挙。住民たちは、ひとりの候補者を擁立する。ヨーロッパに暮らし、NGO職員として世界の自治体における「公共の再生」を調査してきた岸本聡子だ。地縁なし、政治経験なしの彼女の相手は3期12年続く現職区長。しかも岸本が日本に帰国したのは投票日2ヶ月前。ここから岸本と彼女を擁立した住民との対話を狙っての本気の対話が始まる。

《監督 ペヤンヌマキ コメント》

こんにちは、杉並区に住んで20年になるペヤンヌマキです。私が住んでいる閑静な住宅街に大きな道路を通す計画があることを知りました。計画が進むと私の家は立ち退きになってしまいます。自分のことに精一杯で社会問題のことなんてちっとも考えてこなかった私ですが、自分の住まいが奪われる危機に直面して初めて、政治や選挙が私たちの生活につながっていることに気づきました。そして・・・カメラを回し始めました。投票率を少しでも上げるために。

本当は、猫とまったりお昼寝したり、お気に入りの川沿いを散歩してバードウォッチングを楽しんだりしていたただけなんです。だけど黙っていたら、この生活が奪われてしまう。もう黙っちゃられない!

これは現在私に起きていることであり、杉並区で起きていることであり、どこでも誰にでも起こりうること。



・監督プロフィール

ペヤンヌマキ

劇作家・演出家/演劇ユニット「ブス会*」主宰
現代に生きる女性のリアルをシニカルさと優しさが共存する視点で描き続けてきた。
また脚本家としてテレビドラマなどの映像作品も手がける。
舞台『女のみち』シリーズ、『お母さんが一緒』（第60回岸田国土戯曲賞最終候補作品）、『The VOICE』、明日日プロデュース『ピエタ』、テレビドラマとして『来世ではちゃんとします』シリーズ（テレビ東京）、『特集ドラマ 雨の日』（NHK総合）、『有村架純の撮休』『竹内涼真の撮休』（WOWOW）など。

【スタッフ・キャスト】

出演：杉並区民のみなさま
主題歌：『黒猫同盟のミュニシバリズム』
作詞・作曲：ブランシャール明日香
歌唱・編曲：黒猫同盟
音楽：黒猫同盟（上田ケンジと小泉今日子）、向島ゆり子、ブランシャール明日香

プロデューサー：松尾雅人
監督：ペヤンヌマキ
撮影：ペヤンヌマキ 古貝暁人 松尾雅人
音楽：黒猫同盟（上田ケンジと小泉今日子） 向島ゆり子 ブランシャール明日香
MA：高梨智史
素材提供：田中創 畠山理仁 デモクラシータイムス
写真：田中創
制作協力：田川友紀 古澤祐介 山口永詩
法律監修：三浦佑哉
宣伝協力：半田百子（momocan） 山口雅

製作・配給・宣伝・著作：
映画 〇月〇日、区長になる女。製作委員会

公式HP:<https://giga-kutyu.amebaownd.com>

公式X: @eigakucho

映画『〇月〇日、区長になる女。』予告:

<https://www.youtube.com/watch?v=dSwzB1oZ7To>

(以上、「映画 〇月〇日、区長になる女。製作委員会」資料『映画 区長になる女基本情報』より)

『映画〇月〇日、区長になる女。』監督インタビュー

“社会派”ではなかった劇作家・ペヤンヌマキが杉並区長選挙に挑む岸本さとこのドキュメンタリーを撮る理由

*この記事は、2022年の杉並区長選挙時にライターで杉並区民の丘田ミイ子さんが監督ペヤンヌマキにインタビューしたものです。丘田ミイ子さんのnoteからご本人の許可をいただいて転載しています。

いくつものぼりが今日も風にはためいている。

「静かな街を壊さないで」というその言葉を幾度も通り過ぎた先に私の家はある。初めて見たのはいつ頃だっただろう。3年くらいは経つだろうか。調べずとも、その横に添えられた

「133号線道路延長反対」「測量お断り」という文字を見れば、この南阿佐ヶ谷・成田東地域の住宅街や病院や木々や公園を根こそぎ壊して道路が作られようとしていることはわかる。子どもの通学路やこの辺り一帯の保育園の散歩コースにまでその道路は及んでいた。家こそ対象区域ではなかったもののまるで他人事ではなかった。

「杉並区都市計画道路」と調べてさらに慄いたのは、133という数字だけではなかったことだ。132号線拡幅計画、有線整備路線227号線の具体化…。西荻に高層ビル、高円寺純情商店街の危機、阿佐ヶ谷北東地区の再開発計画と、「まちづくり」という名で杉並のあらゆる街並みが壊されるかもしれないこと、そして多くの住宅に住む人々が立退の危機に脅かされていることを知った。

杉並に住んで10年、待機児童問題をはじめこれまでもあらゆる区政のやり方に暮らしを翻弄されてきた私がこの問題に関心を寄せるのは自然な流れだった。

だから、昨年の衆院選は一つの光だった。11回目の当選を狙っていた自民党の石原伸晃氏が我が東京8区で敗れた上、比例代表の東京ブロックも惜敗率で及ばず落選したのである。当選したのは吉田はるみ氏だった。“新人”と書かれた文字がとても清々しかった。初めて選挙が面白いと思った。

「政治の話はやめろ」、「選挙の話をするな」という人がいる。それは、「暮らしの話をするな」と言っているようなものだと思う。「税金高いね」とか「近所の児童館つぶれちゃって」とかは日常会話に普通に出るのに不思議な話だ。

私はそれに抗いたい。

総理大臣は選べないが、区長は私たちが選ぶのだ、止めるのだ、と今回の選挙について鼻息荒く調べていると、意外な名前が目に入ってきた。

ペヤンヌマキ。
「ブス会*」主宰の劇作家で演出家の、あのペヤンヌマキさんである。

彼女の創る演劇や脚本映像が好きでこれまで何度も観てきたが、「選挙」に紐ついてその名前を見つけたことに最初は驚いた。検索すると、「〇月〇日、区長になる女」と題された動画が出てきた。区長選に立候補した岸本さとこ氏に密着し、ドキュメンタリーを撮っていたのである。めちゃくちゃ面白かった。

一人の区民としてそれを撮るに至った理由や思いを知りたいと思った。演劇について書くライターとして私だからこそできることかもしれない、とも思った。

そう思い立ったが吉日、私は今日ペヤンヌマキさんのお家に伺い話を聞いてきた。これぞ、まさに突撃インタビューだ。これからここに書くのは、選挙と創作、それらを含む“暮らし”の話である。

【突撃インタビュー】



ペヤンヌマキが岸本さとこドキュメンタリー「〇月〇日、区長になる女」を撮る理由
阿佐ヶ谷駅での街宣の様子を撮影するペヤンヌマキさん

ある日突然ポストに入っていた、「測量」という文字——早速なのですが、ペヤンヌさんが岸本さとこさんのドキュメンタリーを撮ろうと思ったきっかけを教えてください。

ペヤンヌ：自然豊かなこの場所がとても気に入っていて、ここに住んで20年近く経ちます。そんな中で、3年くらい前かな、初めてポストに「測量」のチラシが入っていたんですね。近所のかかりつけの病院でも「道路計画の反対署名のお願い」というポスターが貼ってあって。その計画が進行されると、病院も私のマンションもこの辺り一帯が立退になるとそこで初めて知って。これは他人事ではないぞ、と調べ始めると、杉並区の悪政がパーっとネットに出てきて。どうやら道路計画・再開発計画も住民の反対を押し切って押し進められようとしていると…。「自分の住まいが奪われる」という身近な危機を感じて初めて区政に興味を持ち始めたんです。それが最初のきっかけでした。その後、1年後の6月に区長選挙があること、そこで区長を変えないとこの計画が進められてしまう、という情報まで辿り着いて…。

——私もそうなのですが、やはり暮らしの危機というのが背景にあったんですね。

ペヤンヌ：そうですね。だから、その区長選にはボランティアでもなんでもいいから何かしらで関わりたいと思っていて情報を追っていたんです。そんな中で「住民思いの杉並区長をつくる会」というのが今年の1月に発足されて…。でも問題は、「候補者がいない」ということだったんですね。

——その段階ではまだ岸本さんの名前も挙がっていなかったと。

ペヤンヌ：そう。発足したもののこの段階で候補を探すところからって大丈夫？って正直思ったんですけど（笑）。現職の区長は3期12年やっているし、頼もしい候補がいないと致命的だなと思っていたところに「岸本さとこさんが立候補することになった」とニュースが入ってきて。調べたら、ヨーロッパで市民運動を支えるNGOの仕事を20年やっていた方で、しかも女性で同世代。その段階でかなり気になって4月の決起集会に行ってみたくて。そこで初めてご本人を見て「この人を応援したい」と思って、そこから3日間街宣のビラ配りに行ったんです。

——実際に参加をしてみてどうでしたか？

ペヤンヌ：ご本人とお話する機会もあったので、自分が演劇をつくったり本を書いたりしていることを伝えたら、ボランティアの方の中にも創作をしている人がたくさんいるからクリエイティブチームを立ち上げて外に広がるような動きができれば楽しいよね、出るなら面白い選挙にしたいよね、って仰って。もう大賛成！と思いましたね（笑）。そもそも投票率自体が30%とかの険しい現状なので、そこを上げるところから取り組む、映像とか創作の力を信じて今まで仕事でやってきたことが活かせるなら尚良いなと思ったんです。そこでYouTubeで選挙期間中に密着したドキュメンタリーを発信して、岸本さんの魅力や活動を伝えられたらと。あと、それとは別にもう一つやりたかったのが、選挙後も含めて岸本さん自体のドキュメンタリーを長く撮っていきたいということ。そんなお話をして撮らせてもらうようになったんです。

ドキュメンタリーを撮ってはじめて、余所者ではなくなった気がした

——それはやはり創作を生業とするクリエイターとしても、「この人に迫ると面白いだろうな」という魅力があったということでしょうか？

ペヤンヌ：そうですね。自分の生活を守りたい、区長を変えたい、というのが最初のきっかけだったのが、岸本さんと直接お会いしたらすごく魅力的な方だったので、「この人を撮りたい」という気持ちになってきて…。それはたしかにクリエイターとしての創作欲の芽生えだったと思いますね。岸本さんが区長になられた後に、これまでの悪政をどんな風に正していくのかという過程を見たいというのもありました。めちゃくちゃ面白いだろうなと思って。

——ペヤンヌさんの作品を観てきた一人としても、その創作活動との紐付きにはとても関心がありました。

ペヤンヌ：でも、そこには落とし穴もあって。創作欲ということに振りすぎちゃうと、自己顕示欲みたいなものが強く出てしまうので、それはボランティアとしてマズイな、とは常に意識していましたね。選挙を使って選挙に関係のないことを、平たくいうと、自分のやりがいになりすぎちゃうと全然違う方向に暴走しちゃうので。それが恐ろしいところでもあって…。

——なるほど。

ペヤンヌ：でも、そういった形で創作に取り組むことで、新たな出会いや発見がたくさんあったんです。岸本さんに密着するようになって早くも暮らしが変わったというか、自分の生活に地域の人との関わりが初めて生まれたんです。長崎から上京してきた私は、20年住んでも、これまでどこか他所者という感覚があったし、賃貸で近所付き合いもなくやってきて。でも、この133号線に反対する人はすなわちみなさんご近所なわけじゃないですか。だから、気付いたら近所にめちゃくちゃ知り合いができていたっていう…。中でも、森さんという方はとても象徴的な方で。いろんなお話を聞いているうちに家に遊びに行くことになり、お裾分けなんかもしてもらって（笑）。森さんのお宅には75年をかけて育ったすごく立派なメタセコイヤの木があるんですけど、計画が進むとそれもバツサリ切られちゃうんです。

——緑豊かな～なんてよく言いますが、それは、何年もかけて緑を育んだ場所ということですよね。住宅はもちろん、住民やこの街を訪れる人にとって安らぐ居場所である公園や木々が壊されることもとても気がかりです。

ペヤンヌ：先日、道路計画や再開発に反対する大きなデモがあったんです。高円寺と西荻とここ成田東を起点にそれぞれのチームが出発して、最終的には落ち合うみたいな形で。高円寺のチームには若い方も多く、西荻のチームには商店街のお店の人がたくさんいて。私は自分の暮らしのあるところから出発したんですけど、お年寄りが本当に多く参加をされていて。最高齢で90歳だったかな、その方にも話を聞かせてもらって。一生懸命歩いていらっしゃいましたね。

——よく銭湯に行くんですけど、そこにも本当に多くのご老人がいらっしゃいます。誰にとっても受け入れ難いですが、この街で長く生きてきたお年寄りの住み慣れた家を奪い、慣れない場所に追いやる、ということはとても酷なことだと感じます。

ペヤンヌ：調べれば調べるほどおかしなことが出てきますよね。選挙活動でもしづらみを感じるものが多々あります。日本の政治の縮図みたいになっているんですよね。区政で食い止められることや変えられる体制もあるのに…。こんなに生活に関わる選挙ってないなって思いながらドキュメンタリーを撮っています。

でも、関わって初めて思いましたが、選挙って面白いんです。今回の特殊なところって岸本さんは無所属で住民の会が立ち上げた候補者ということ。だから、街の人が中心になってやっている。大変なこともありますが、楽しいです。



女性のほとんどいない区議会の傍聴で感じたこと

——岸本さんとこさんが当選したら、杉並区初の女性区長ということになります。女性の生きづらさが叫ばれる今、そのこととても心強かったです。街宣で岸本さんが仰った「女性が無理なく長く働ける社会、安心して暮らせる社会、それは誰もが無理のない社会」という言葉がすごく印象に残っています。

ペヤンヌ：女性だからなんでもいわけではないけれど、実際に区議会の傍聴に行ってみたら、一人を除いて区の職員幹部は全員男性、もちろん区長も男性、その側近も男性というのが現実の風景にあって…。そんな状況で女性が過ごしやすい社会やその権利を守る区政ができるのはとても思えなかったんですよ。単に女性を推したくてやっているわけじゃなくて、理由があって変えたいと思っているんです。

——そうですね。何かを変えたいと思った時に、これまでのやり方ではそれが叶わないように、人が変わらなければ、区政も国政も世の中も変わらないと私も思います。

ペヤンヌ：今の区政は裕福な人や力を持っている人にしか目がいていないというか、市井の人々一人一人の暮らしがまるで見えていない気がしています。でも、政治って弱い立場の人に寄り添うものであるべきだと思うんですよね。現職の区長を悪者にしてディスるとかは良くないと思うけれど、「なんでこんな区政になったんだろう？」っていうことを考えていくと、やっぱり同じ人が同じポストに長くいることってどうしてもしがらみができてきてしまうし、その人や周囲が有利な状況ができてしまうと思うんです。単純に人間の仕組みとして。だから、誰であろうと良くない状態だと思うんですよね。

——選挙や政治に関することを言及したりすると、少なからず煙たがられたり、タブー視される現状が未だにあって。たしか、安保法案強行採決のあたりに「非戦を選ぶ演劇人の会」を取り上げたいとあるメディアに企画を出したらはねられたことがあったんですけど、こういう付度って本当にあるんだとすごくショックだったんですよね。選挙に関してもきつと山ほどあると思います。このタブー視と投票率の低さや選挙との距離感って絶対無関係じゃないですよ。

ペヤンヌ：私自身、創作活動をやってきた割には「社会派」ではないというか、これまで社会的なお芝居をやってきたわけでもないし、そういった発信もしてこなかったんです。でも、コロナ禍で国に起きていることが悉く酷いことの連続で…。一気に自分の将来が不安になりましたし、それを守ってくれる政治ではないということがとても怖く感じましたね。諦めずに変えていきたいけど、国政ってなかなか変えるのが難しい。だけど、区長を変えるのは直接投票だからダイレクトに影響する。国単位で言うと話が大きくなってしまったり、接点を見出しにくかったりするけど、目の前の暮らしについてなら誰もが自分事として考えることができるんじゃないかなって…。少なくとも、区政から変えていける状況があれば、国も今よりも少しはよくなるんじゃないかなって。

街宣は演劇に、選挙は劇団に似ている？！

——先日、初めて街宣を最初から最後まで聞いたんです。岸本さとこさんと山本太郎さん、吉田はるみさんの3名がお話をされていて。ものすごく分かりやすく勉強にもなりましたし、何よりめっちゃくちゃ面白かったんですよ。

ペヤンヌ：そうなんですよ！ 街宣の面白さに気付くとハマりますよね（笑）。候補者も結局会って見ないとわからないじゃないですか。生でみた情報じゃないと選べないんですよ。生身の人間から発せられる情報ってすごいから。その点ではかなり演劇と近い。その人の人柄やバックボーンって体から立ち上がっていくものだから、舞台から発せられる役者さんの情報やエネルギーってやっぱり豊かじゃないですか。それと同じものを感じたというか、今回やってみて、私の中に「演劇好きは選挙にハマる説」が浮上りましたね（笑）。なんか、劇団ともちょっと似てるんですよ。一人の人が立候補して、そこを支えながら共に作る人たちがいて…。それで言うと、山本太郎さんは政治の世界に山本太郎劇団を立ち上げたんだなと感じましたね。

——なるほど、候補者は劇団主宰…。これは、ペヤンヌさんだからこそ聞けるお話ですね。そういう意味でも山本太郎さんの街宣はものすごく面白かったです。なんとというか、「仕上がっている！」と感じたし（笑）、一瞬も飽きなかったんです。

ペヤンヌ：誰にでも分かりやすく、国政のこと、世の中のことを解説しているらしいんですよ。だから、みんなの政治だと思えるというか…。やっぱり、俳優さんって人に伝えることに長けていらっしゃる。今回の選挙でも応援演説に俳優さんが駆けつけてお話されていましたけど、やっぱり聞かせる力があるんですよ。

——普段ペヤンヌさんがされているお仕事と思いがけないリンクがあったのですね。街宣は演劇に、選挙は劇団に似てるというのはとても面白いお話でした。

ペヤンヌ：私も2010年に「ブス会*」という自分の劇団立ち上げて、都度つくりたい演劇を掲げてきたわけなんですけど、やりたいことをやるだけだと自己満足になっちゃうし、人に観てもらわないと意味がない。だから、制作さんや広報さんの力をお借りして、宣伝にかなり力を入れてきたんですけど、それって、今自分がやっていることとほとんど同じなんですよ。ボランティアに行くと、まずチラシの折り込みからやるんです。これの速さに関してはやっぱり演劇人に叶う者はいない！（笑）。もう効率が違いますからね。

——面白い！ 演劇のチラシ折り込み文化にまで通じているとは！

ペヤンヌ：演劇と似ていると思っではじめたわけではなかったのに、似ていることがたくさんあったのは発見でしたね。最初は創作する立場の人間が権力側についてダメだろうという気持ちがあったし、政治と関わる芸術家の方もいるけれど、そことは無縁でいたいと思っていくくらいで。でも、今回のこういうことって権力にすり寄ることではなく、「暮らし」なんだと実感しましたね。社会と演劇が繋がっているという発見もあったし、自分事だということを感じました。

——私は四人姉妹なのですが、うち三人が杉並区民なんです。姉妹の夫も交えて選挙について話したり、友人との会話の話題に出るんですけど、やはり一人一人考えは違って、失望を通り越して諦めている人もいて。誰がなっても一緒だ、という具合に。その気持ちもわからなくないんですけど、極端な話、現状10個ある暮らしのトラブルを15個に増やす可能性のある人と8個に減らす可能性のある人だったらどちらに託したいかという話なんじゃないか、と私は思ったりして。

ペヤンヌ：その暮らしの上で抱えているトラブルの原因が隠されてしまっていることもまた問題なんですよ。岸本さんは市民参加型の政治をやりたい、そのためにどんどん区民に向けた情報開示をやっていくと仰っていて…。区長が変わるだけでなく、仕組みが変わらないと世の中は変わらないし、区長一人でできることは限られているから、杉並区のことをよく知っている方や暮らしの中に問題を抱えている方からの声を集めることで、その案を吸い上げていいものを作っていく。その過程を追うってすごく面白いと思うんです。それが、私が選挙期間だけでなく、岸本さんという人をできるだけ長く撮りたいと思った一番の理由なんです。暮らしを守りたい一人の区民としても、面白いものをつくりたい一人の創作人としても。

——とても興味深いお話の数々でした。私も一人の区民として、この町で子どもを育てるいち母親として、そしてフリーライターとして、選挙や政治について考え続けたいと改めて感じました。

インタビューを終えた後、荻窪駅の街宣に向かうペヤンヌさんが活動を通して知り合った森さんという70代の女性を紹介してくれた。あの立派なメタセコイヤの木のあるお家である。

立ち話をしていると、その隣に住む外国人の親子が「hello」と声をかけてくれた。「How do you say nice to meet you in japanese?」という女性の言葉に森さんががらっとした声で「ごきげんよう！」と答えた。私たちはしばらくそこで会話を交わした。選挙の話をした。家族の話をした。今晚の夕飯の話も。「see you soon」と親子が家に入る。木漏れ日のような髪色をした小さな女の子が笑いながら手を振ってくれる。森さんが「カブを漬けたのよ」とペヤンヌさんに小瓶を差し出した。「じゃあ、またね」。みんな、生きている。切られるかもしれないこの木の下で、壊されるかもしれないこの場所で、今日の暮らしを生きている。明日も、明後日も、何年もこの風景がどうか守られてほしい、と思わずにはいられなかった。

杉並区に来てすぐの頃、待機児童問題が深刻でフリーランスの我が家は保育園に入れず、仕事のある日は牛込の姉の家に娘を預けていた。移動費や駐車費で時間とお金の出費がかさみ、働いても働いてもお金は全く手元に残らなかった。

悔しくて、区役所前で行われたデモに参加した。嘆願書も提出した。そうしてようやく入れた認可保育園は在園中に取り壊された。程なくして児童館もなくなった。自分の毎日通っていた場所が跡形も無くなっているその光景を見て思わず泣いてしまった幼い娘の顔を、私は今でも忘れられない。

区に、国に疑問を、怒りを抱かずにいられるわけがなかった。

少しずつ保育園が増え始めた頃から、区は誇らしげに自分たちの手柄であるかのように事あるごとに「待機児童ゼロ！」を表明しているけれど、多分それは、私たちが動いたからだよ、と、私はまだ信じていた。

いくつものぼりが今日も風にはためいている。

「静かな街を壊さないで」というその言葉を幾度も通り過ぎた先に私の家はある。いつになるだろうか。こののぼりが全ての家から無くなり視界がひらかれ、自分の名前を記した表札の横から「測量お断り」のプレートを外せるようになるのは。晴々しい顔になったこの街の風景が見れるようになるのは。それが叶うのなら、なんでもしたい。

だって、ここが私たちの代わりがない、たった一つの“暮らし”なのだ。

取材・文／丘田ミイ子（ライター・そして杉並区民）

（以上、「映画 〇月〇日、区長になる女。製作委員会」資料『監督インタビュー』より）

＜論壇時評＞ 統一地方選とムニシパリズム 巻き起こる新リベラル旋風 中嶋岳志

4月に行われた統一地方選挙では、新しい女性の当選者増加が注目された。東京都杉並区をはじめ、兵庫県宝塚市などで議会構成員の半数以上が女性になった。今回の選挙の画期的な特徴といえよう。

女性候補者の当選に注目が集まるが、重要なのは「女性」であるという属性以上に、彼女たちが訴えた政策にある。特徴的だったのは、気候変動への危機感を基にした環境問題への取り組み、そしてジェンダー政策だった。これらの政治課題は、「票にならない」と言われてきたが、今回の結果を見ると、訴えが確実に得票につながっている。いまいったい何が起きているのか。

この流れの発端には、昨年杉並区長選挙がある。4選を目指した現職に対して、政治家経験のない岸本聡子氏が挑み、187票差で勝利をおさめた。岸本が訴えたのは、気候変動への抜本的な対策や、行き過ぎた民営化への反対だった。

当選後、岸本が出版した『地域主権という希望-欧州から杉並へ、恐れぬ自治体の挑戦』（大月書店、2023年）では、岸本の政策への支持は、世界的なムニシパリズムの潮流の中に位置づけられる。

ムニシパリズムとは、住民の主体的参加に基づく自治的民主主義のことで、一般には「地域主権主義」と訳される。近年、世界中で公共サービスの民営化・市場化が進んだが、これをもう一度、公営化しようとする傾向が強くなり、公的住宅の拡大などに力を入れる。ヨーロッパではバルセロナ（スペイン）やナポリ（イタリア）、グルノーブル（フランス）などで展開され、「コモンズ」と言われる公共財や自治的制度が見直されている。

岸本いわく、ムニシパリズムが共有するのは、新自由主義への異議申し立てである。行き過ぎた格差社会を生み出した新自由主義から決別し、自治体レベルの選挙で首長や議員の議席を奪取することで、具体的に政治を動かそうとする。

ヨーロッパの自治体では、独自の環境政策がすすめられている。ディーゼル車の都市中心部への乗り入れ規制を強化し、都市公共交通や自転車道路を拡張する。地元産の再生可能エネルギーを推進する。国家は原発産業や化石燃料に基づく産業、大規模集約的な農業、自動車産業などを成長戦略の中に組み込んでいるため、なかなか新しい環境政策へと転換することができない。それに対して、自治体は小規模ながら、具体的な「別の道」を実現することができる。この同時多発的なネットワークの集積を、岸本はムニシパリズムの魅力ととらえている。

ムニシパリズムは、旧来の左派政党への批判を含んでいる。左派政党の多くはトップダウンの決定システムを採用し、組織の論議が幅を利かせる。どうしてもパターナル（父権的）な体質が目立ち、ボトムアップの決定システムをとることができない。選挙でも、組織を通じた「動員」が重視され、一般有権者と候補者の対話が生まれにくい。

これに対して、岸本がとった選挙戦術は「対話型の街宣」だった。彼女は聴衆にマイクを回し、出された質問や提言に答えるというスタイルをとった。そこでよい情報が入ってくると、すぐに政策集の中に加え、ビジョンを更新していった。

東京新聞Web（5月8日）に掲載された記事「服を買わないと宣言したら『心に羽が生えた』 杉並区の主婦の多彩なチャレンジ 『ひとり』を怖がらない生き方」では、2030年までは服を買わないことを宣言した1人の女性が紹介されている。彼女は気候変動問題への関心から、服の大量消費に疑問を感じ、リペア（修理）に力を入れた。そんな中、岸本の立候補に共感し、岸本がいなくても1人で駅前に立つ「ひとり街宣」を始めた。これがどんどん拡大し、岸本の勝利を支えることになった。今回の統一地方選挙でも、「ひとり街宣」の連鎖が杉並区議会議員選挙を象徴する光景として脚光を浴びた。

衆議院・参議院議員の補欠選挙で野党第1党の立憲民主党が惨敗する中、新しいリベラルの政治潮流がボトムアップで拡大してきている。世界的なムニシパリズムとの連動に注目したい。（なかじま・たけし=東京工業大教授）
（東京新聞2023年6月1日）

資料④ 岸本聡子著『杉並は止まらない』紹介

岸本聡子



杉並は止まらない

著：岸本 聡子
2024年11月12日 地平社

民主主義を、アップデートする。
ケア中心の脱炭素社会、住民自治のアップデートといったビジョンを掲げ、全国から注目を集める杉並区長・岸本聡子。さまざまな壁にぶつかりながらも、住民と一緒に前進してきた、その2年間の闘いを報告する。

もくじ

- 1 3年目に入った「対話の区政」
- 2 手探りのスタート
- 3 職員はコストではなく財産
- 4 当たり前の人権、当たり前の多様性
- 5 修復しながら前に進む
- 6 議会も変わった！
- 7 杉並は止まらない

著者について

岸本 聡子（きしもと・さとこ）
東京都杉並区長。公共政策研究者。1974年東京生まれ。20代で渡欧しアムステルダムを本拠地とする政策シンクタンク「トランスナショナル研究所」に所属。新自由主義や市場原理主義に対抗する公共政策、水道政策の研究、市民運動と自治体をつなぐコーディネイトに従事。2022年6月の杉並区長選挙で現職を破り勝利、初の女性区長となる。著書に『地域主権という希望』『私がつかんだコモンと民主主義』ほか。

限定30部 上映会場で販売 特別価格1500円

資料⑤『映画〇月〇日,区長になる女。』を見て(感想文)

この映画の冒頭に、映画のもうひとつの主人公とも言えるアケボノスギ、その根元から梢のてっぺんまでをドローンで捉えた場面があります。カメラが上がって行くにしたがって、その向こうに多くの人びとの生活の場、「地域」の広がりが見えてきます。そこでこれから繰り広げられていく住民の活動、なかなか絵にしにくい「地域」のイメージが具体的になる場面です。

「みんなのことはみんなで決める」

区長選挙の開票の日、選挙事務所の前で大きな紙に書かれた何行かのコール文句の最初のことばです。この紙を掲げた選挙応援の人たちが言います。「当選しても私たちは万歳三唱はしません、その代わりに声を合わせて次のようなコールします」。

コールのラストは、『選挙は続くよどこまでも』で締められています。「選挙に負けたとしても、このコールをしよう」、選挙結果が知らされる直前には、そんな声もかわされていきました。



「草の根から民主的な政治を取り戻す」。民主的な政治？それをどうやって実現する？そのプロセス自体が、この映画が描きだしたものの、そのものであるようです。ふとドキュメンタリー映画『私たちの自由について～SEALDs2015』の中で聞こえた「民主主義って何だ、これだ！」と言う国会前に集まった人々のコールが頭をよぎりました。

ミュニシパリズムと言うのだそうです。「地域に根付いた自治的な民主主義を重視する考え方」です。主役はあくまで区民、住民。住民自治こそが民主主義。

それは、この映画の主人公の岸本聡子の区長、区政へのチャレンジであると共に、カメラを持って撮り始めたペヤンヌマキ監督にとってもチャレンジだったのだらうと思います。自然界というが、肩に力の入っていないアプローチに見えながら、きっと途中では、落ち込んだり、投げ出したくなったりしたことたくさんあって、先行きのはっきりしないチャレンジが続いたのでしょう。

よく撮り続けたなあと思う名場面がいくつかあります。そのひとつ、岸本さんを区長候補に推しだした市民活動の最長老、小関啓子さんとの夜の街中での議論。「要求と政策は違う」。なかなか意見が一致しなくて、それはそれで困ったことなのですが、どちらも避けず、逃げず、妥協せず、話し合っていくところ。カメラは延々とそれを撮り続けています。「どうなるんだらう」と言う撮影者のドキドキ感が伝わってくるようです。きっとこうしたやり取りが、ほかの選挙応援の人ひとりひとりと続けられ、この選挙運動がつくられてきたのでしょう。民主主義ってこれだ、と思います。

今の政治に異議申立をしていく、変えていくには、こうすればできるという映画ではありません。こうやれば選挙に勝てるという方法を描いた映画でももちろんありません。住民運動や、自治を自分のこととして、住民がひとりひとり自分の足元を

しっかりと捉え、生活を見つめ、そこから自分たちは何ができるか、その方法を作り出していくしかないことをこの映画は実感を含めて描いています。

それは、政治を自分たちのものにして行くための、民主主義のおそらく一番難しいことだと思います。でもそうしたことが自覚できているからこそ、いろいろな困難も克服して、「こうしたい」と思うものが共有でき、その熱意が集まり、エネルギーが出るんだと思います。新しい状況を創っていく喜び、その確かな実感にあふれています。変えていく運動にはそれが必要なんだらうと思います。

この映画を自主上映の形で広げて、できるだけ多くの人に観てもらいたいと思いました。

ひとりひとりの住民が、身近なところから政治を考え、「住民自治とは?」「公共とは?」を考えていききっかけにしたい。自分たちにできる行動の第一歩にこの映画を「利用」させていただきたいと思っています。未来への希望に満ちた新しい市民映画です。

(法学館憲法研究所「シネマde憲法」2024年2月23日『映画〇月〇日,区長になる女。』より転載 https://www.jicl.jp/articles/cinema_20230223.html)

資料⑥『映画〇月〇日,区長になる女。』自主上映のご案内



『映画 〇月〇日、区長になる女。』は、自分たちで上映会の出来る映画です。

お問合せ、上映料金など、詳細はこちらから <https://giga-kutyu.amebaownd.com/pages/7393903/gallery>

* そのページの【上映料金】のところに、こんな記述もあります。

教職にある方、注目!!

「※学校で、生徒さんに無償で上映する場合は、上映料無償で提供させていただきます。(上映素材等の発送物の送料だけご負担お願いいたします)」



映画リーフレットのご案内

- 区長選当時、杉並区で起きていたこと
- 候補者の一日～ある日の街頭演説スケジュール
- KEY WORD 映画に出てくる気になる言葉を解説!
- 対談 東本久子さん×小関啓子さん
など興味深い記事が満載

上映会場で限定25部販売しています。

資料⑦ 本日のトーク・シェアに向けた別冊資料について

本日のトークシェアは、アジア太平洋資料センター（PARC）共同代表で杉並区長選で選挙対策委員長を務められた岸本聡子事務所の内田聖子さんにお話をいただきます。

とくに地域での市民の活動のつながりが、今回の区長選に活かされたこと、また、「選挙は続くよどこまでも」の合言葉通り、その後3年の区政の中で、それらがどのように活かされているかについてお話しいただきます。



内田聖子さんのプロフィール

アジア太平洋資料センター（PARC）共同代表。杉並区民。著書に『日本の水道をどうする!? — 民営化か公共の再生か』（編著、コムズ）『デジタル・デモクラシー ビッグテックを包囲するグローバル市民社会』（地平社）など。

別冊資料として当日の講演資料に加えて、区政報告など5つの資料を手元資料にはさみ込んであります。

〈別冊資料①〉

対話と住民参加の自治体づくり—杉並区の経験から—



〈別冊資料②〉

地べたからの民主主義を 地域からの修復
(地平社刊「地平」2024年12月掲載)

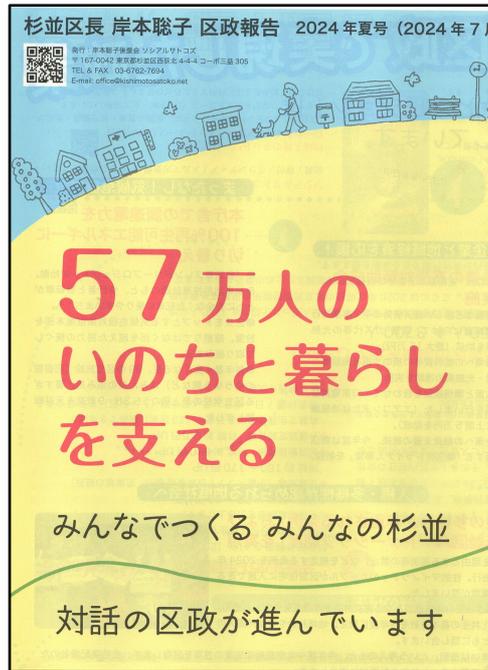


地べたからの民主主義を 地域からの修復

記事見出しから
〈閉塞感の中でどこに希望を見いだすか〉
〈民主主義の負債〉
〈選挙は続くよどこまでも—市民的選挙戦略〉

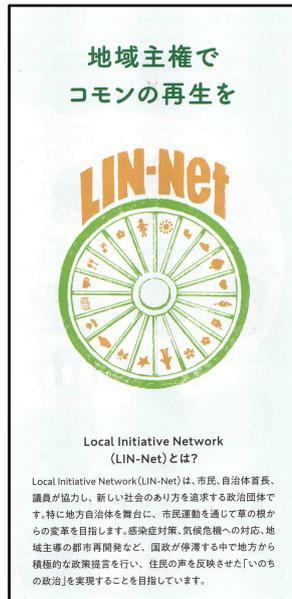
〈別冊資料③〉

「杉並区長 岸本聡子 区政報告」2024年夏号
(2024年7月10日発行)



〈別冊資料④〉

「地域主権でコモンの再生を LIN-NETとは？」



LIN-Netは、市民、自治体首長、議員が協力し、新しい社会のあり方を追求する政治団体です。

とくに地方自治体を舞台に、市民運動を通じて草の根からの変革を目指します。

感染症対策、気候危機への対応、地域主導の都市再開発など、国政が停滞する中で地方からの積極的な政策提言を行い、住民の声を反映させた

「いのちの政治」を実現することを目指しています。

〈別冊資料⑤〉

「杉並区長 岸本聡子 後援会」SOCIAL SATOKOS



なぜ君は総理大臣になれないのか

2020年/119分/大島新監督

連絡先:ネツゲン: :<http://www.nazekimi.com/>

2003年、32歳で民主党から衆議院選挙に初出馬した小川は、その時は落選するも、05年の衆議院選挙において比例復活で初当選。09年に政権交代が起こると「日本の政治は変わる」と目を輝かせる。しかし、いかに気高い政治思想があるろうとも、党利党益に貢献しない出世はできないのが現実で、敗者復活の比例当選を繰り返していたことから発言権が弱く、権力への欲望が足りない小川は、家族からも「政治家に向いていないのでは」と言われてしまう。17年間追い続けた小川の姿を通して、日本政治の未来を問いかけていく。

シンちむどんどん

2023年/98分/ダースレイダー ブチ鹿島 監督

連絡先:ネツゲン: :<http://www.nazekimi.com/>

ラッパーのダースレイダーと時事芸人のブチ鹿島が選挙戦を突撃取材したシリーズ第2弾、本土復帰50年の節目となった2022年9月の沖縄県知事選と、その争点となった基地問題に切り込んだ。2人は基地問題について話を聞くため、座り込み抗議が約3000日にわたって続く辺野古の現場へと足を運ぶ。選挙の翌月、ひろゆき氏による「座り込み抗議」への冷笑ツイート騒動が起こる。見過ごせないと考え、二人は再び沖縄へ。そこで目にしたものとは。いつもは陽気なラッパーと芸人が言葉を失う予想外のラスト。

劇場版 センキョナンデス

2023年/109分/ダースレイダー ブチ鹿島 監督

YouTube番組「ヒルカラナンデス(仮)」を配信するラッパーのダースレイダーと時事芸人のブチ鹿島が、同番組のスピノフとして立ち上げた選挙取材企画を基に映画として完成させた長編ドキュメンタリー。

ロンドン育ちで海外メディアの情報に精通するダースレイダーと、新聞14紙を毎日読み比べするというブチ鹿島。2021年の衆院選では香川、22年の参院選では大阪・京都を訪れて合計十数人の候補者に突撃取材を敢行し、忸怩なしのインタビューで思わぬ本音を引き出していく。そんな中、大阪での取材中に安倍晋三元首相銃撃事件が発生し、取材の旅は予想外の方向へと展開する。

選挙が生まれる 長野と群馬の挑戦

2016年/71分/湯本雅典監督

2015年9月、集団的自衛権の行使容認を含む「安全保障関連法」が成立した。その後、全国で同法を廃止させるために、野党は共闘して国政選挙を闘おうという声上がり始めた。熊本県では早々と2016年夏の参議院選挙区での党候補一本化が実現した。しかし外の選挙区ではなかなか候補者の一本化が進まず、時間だけが過ぎていった。2016年参議院選挙、長野・群馬の野党共闘の記録。2016年夏の参議院選挙の地方区一人区では、32選挙区すべてで野党統一候補が実現し、11選挙区で勝利した。結果的に憲法改正発議に必要な3分の2議席は「改憲派」に握られてしまったが、民主主義は確かにスタートした。

ミサイル基地がやってきた 島で生きる

2024年/82分/湯本雅典監督/配給:湯本雅典

連絡先:湯本雅典:090-6039-6748

2023年3月、沖縄県石垣島では、陸上自衛隊ミサイル基地が開設した。住民投票を求める石垣市内の有権者による自衛隊配備の賛否を問う住民投票条例制定請求署名は有権者の3分の1以上にあたる14,263筆が集まった。しかし、石垣市は未だに住民投票を実施していない。住民投票を求める若者たち、農民兼市議会議員、漁師など基地に対する人々の想いを丹念につむぐ。

選挙

2006年/120分/相田和弘監督/配給:アステア

2005年秋に自民党公認候補として川崎市議会議員補欠選挙に出馬した切手コイン商・山内和彦氏の選挙活動を追ったドキュメンタリー。成りゆきから立候補することになった山内氏が、「電柱にもおじぎせよ!」を合言葉とする過酷な“どぶ板選挙”に挑む姿に密着。巨大政党・自民党が“政治の素人”を公認候補に仕立てあげ、選挙戦を展開していく過程を、ナレーションや音楽を排した映像で捉え、日本の民主主義の実態を浮き彫りにしていく。

選挙2

2013年/149分/相田和弘監督/配給:東風

東日本大震災直後の11年4月1日に告示された川崎市議会選挙に、「山さん」こと山内和彦さんが「脱原発」をスローガンに再び立候補した。自粛ムードと原発安全神話の報道の中で、他の候補者たちが原発問題に消極的なことに憤りを感じた山さんは、完全無所属での出馬を決意。組織も資金も時間もない中、前回のどぶ板選挙の反省から選挙カーや事務所を使わない選挙活動に挑む。

沖縄と本土 一緒に闘う

2020年/60分/湯本雅典監督

連絡先:湯本雅典:090-6039-6748

南西諸島で急速に進められている自衛隊の基地建設。2019年には沖縄県宮古島、鹿児島県奄美大島で同時に陸上自衛隊ミサイル基地が開所。基地のない石垣島でもミサイル基地建設が始まった。工事開始時期は、カムリワシの営巣時期、それでも防衛省は工事に踏み切った。沖縄では、声をあげ続ける沖縄県民の多くが、米軍基地の拡張を望んでいない。その声は一方向的に無視され続けてきた。であれば、これからどうやって住民は生きて行けばいいのか。その難問に答えを出すかのように動き始めたのが「辺野古」県民投票運動である。

島がミサイル基地になるのか 若きハルサーたちの唄

2021年/60分/湯本雅典監督

連絡先:湯本雅典:090-6039-6748

石垣島では、2019年3月から、陸上自衛隊ミサイル基地の建設が始まっています。しかし、この問題、島の人々の十分な合意が得られていません。そこに疑問を持った28歳の若者たちが2018年暮れに始めたのが住民投票運動。島の有権者の3分の1以上の支持が集まった。しかし、石垣市はこの要請を拒否しました。若者たちが大事にしたのは、「話し合って決めましょう」ということ。若者たちは、裁判にも打って出ました。しかし裁判所は地裁、高裁、最高裁と請求を却下、棄却した。それでも、若者たちは運動を絶やさず続けています。

NO選挙,NO LIFE

2023年/109分/前田亜紀監督

候補者全員を取材することを信条に、国政から地方選、海外までさまざまな選挙の面白さを伝えてきた畠山が、2022年7月の参院選・東京選挙区で候補者34人への取材に挑む姿に密着。1人で選挙現場を駆け巡り、睡眠時間は平均2時間、本業である原稿執筆もままならず経済的に回らないという本末転倒な生き方を続けてきた畠山は、同年9月の沖縄県知事選の取材を最後に引退を決意する。そんな彼が沖縄で出会ったのは、他の地域では見られない有権者の選挙への高い参加意識と、民主主義をあきらめない県民たちの思いだった。

わたしの自由について～SEALDs 2015

2016年/165分/西原孝至監督

連絡先: 西原孝至: 090-4685-7250

2015年夏に国会前を群衆で埋め尽くした学生団体

「SEALDs」に密着したドキュメンタリー。自民党が新たな安全保障関連法案を国会に提出した。日本国憲法第9条で定められた戦争放棄に反するこの政府の動きに、特に若い世代が大きな危機感を持った。東京を中心に立ち上がった学生団体「SEALDs」は、2015年6月から毎週金曜日に国会議事堂前で安保関連法案に対する抗議活動を開始した。手探りでスタートした15年春のSEALDs活動開始から、安保法案可決の9月までの半年間の彼らを追う。第28回憲法を考える映画の会で上映

パークレー 市民がつくる町

2002年/35分/取材・構成: 松原明 佐々木有美

連絡先: ビデオプレス (03-3530-8588)

アフガン空爆反対決議をした町にはそれを生み出す歴史があり、もの言う市民がいた。日本の平和運動に熱いメッセージ。米西海岸、パークレー市。9・11事件後、全米世論の九割以上がアフガン空爆を支持する中で、唯一、反対決議をあげた町である。なぜ、決議が可能だったのか。その答えがビデオになった。民主主義のルールがあたりまえのように根づいていた。住民参加の町づくり。多様な市民が主人公である町の息吹が伝わってくる。

首相官邸の前で

2015年/109分/小熊英二監督

2012年夏、東京。約20万の人々が首相官邸前を埋めた。「ウォール街占拠」の翌年、香港の「雨傘革命」の2年前のことだった。しかしこの運動は、その全貌が報道されることも、世界に知られることもなかった。人びとが集まったのは、福島第一原発事故後の原発政策に抗議するためだった。事故前はまったく別々の立場にいた8人が、危機と変転を経て、やがて首相官邸前という一つの場に集う。彼らに唯一共通していた言葉は、「脱原発」と「民主主義の危機」だった。第21回憲法を考える映画の会で上映

1960年6月安保への怒り

1960年/40分/野田晋吉監督・富沢幸男監督

連絡先: 共同映画株式会社: 03-5466-2311

1960年5月19日の衆議院での強行採決から6月23日の新安保条約批准発効までのおよそ1ヶ月間の各地の街頭運動やストライキ闘争の姿を国会内のニュースフィルムを交えながら人々がどう動いたかを、運動に参加した市民の視点から時間軸に従って記録している。6月4日安保阻止全国統一行動(ストライキ)、羽田八ガチー事件、安保阻止全国統一行動6月15日国会突入と樺美智子さんの死、6月16日安保批准阻止、岸内閣批判、国会解散への根こそぎデモなど

1987 ある闘いの真実

2017年/129分/チャン・ジュナン監督

連絡先: ツイン: 03-6416-1807

1987年1月、全斗煥大統領による軍事政権下の韓国。南営洞警察のバク所長は北分子を徹底的に排除するべく、取り調べを日ごとに激化させていた。そんな中、行き過ぎた取り調べによってソウル大学の学生が死亡してしまう。警察は隠蔽のため遺体の火葬を申請するが、違和感を抱いたチェ検事は検死解剖を命じ、拷問致死だったことが判明。さらに、政府が取り調べ担当刑事2人の逮捕だけで事件を終わらせようとしていることに気づいた新聞記者や刑務所看守らは、真実を公表するべく奔走する。また、殺された大学生の仲間たちも立ち上がり、事態は韓国全土を巻き込む民主化闘争へと展開していく。

500年 独裁者を裁くのは誰か

2017年/108分/パメラ・ウェイツ監督

1980年代、中米のグアテマラで軍が20万人以上のマヤ先住民を虐殺し100万人の難民を生んだ。30年以上の時を経て、このおぞましい事件の責任を問うために、元国家指導者が大量虐殺の罪で訴追される。元国家元首が自らの国で虐殺の罪で裁かれるという前代未聞の裁判。この裁判で、イニシアチブを取ったのは女性たちの姿だった。映画『グラニート』の続編。民衆が自国の最高権力者を裁判で裁き軍事政権を倒すまでを描く。題名は先住民族の人々がスペインの支配やアメリカに支持された軍事政権から受けた抑圧の歴史を示す。

流血の記録 砂川

1957年/56分/総編集: 亀井文夫

連絡先: 日本ドキュメントフィルム社: 03-3463-0950

日米行政協定による一片の命令で、砂川の人々は祖先代々の土地を追われることになった。農民たちの必死の抵抗も警官隊の出動で破られ、第一次測量を許す。そして昭和三十一年十月、砂川の町には全国から応援に集まってきた数千の労働組合員や全学連の学生たちの姿が見られた。強制測量が始まり、数日間は小競り合いが続く。ついに十月十二日、千三百の警官隊出動。世論は警官隊の暴行と政府の無策にわかえり、十四日夜、ついにその年の測量中止が発表された。第73回憲法を考える映画の会で上映

乱世備忘 僕らの雨傘運動

2016年/128分/ビンセント・チュイ監督

連絡先: 太秦: 03-5367-6073

2014年に香港で起こった「雨傘運動」の一部始終を、運動に参加した若者たちの視点から記録したドキュメンタリー。14年、将来的に普通選挙で行政長官を選ぶことができるようになるはずだった香港で、民主主義的な普通選挙の道を閉ざす「8.31決定」が下される。これを受けて「真の普通選挙」を求める若者たちが街を占拠するデモ活動を開始し、警官隊から浴びせられる催涙弾に対して雨傘を手に抵抗したことから、一連のデモは「雨傘運動」と呼ばれた。当時27歳の若手映像作家チャン・ウージン監督がデモの前線でカメラを回し、その中で出会った学生らに焦点を当て、ごく普通の若者たちが「香港の未来」を探し求めた79日間を記録した。

私の想う国

2022年/83分/パトリシア・グスマン監督

連絡先: アップリンク

2019年、突然チリのサンティアゴで民主化運動が動き出した。その口火となったのは、首都サンティアゴで地下鉄料金の値上げ反対がきっかけだった。その運動は、リーダーもイデオロギーもなく、爆発的なうねりとなり、チリの保守的・家父長的な社会構造を大きく揺るがした。

運動の主流となったのは、若者と女性たちだった。150万の人々が、より尊厳のある生活を求め、警察と放水車に向かってデモを行ったのだった。

それは2021年36歳という世界で最も若いガブリエル・ボリッチ大統領誕生に結実する。

目出し帽に鮮やかな花をつけ、デモに参加する母親、家父長制に異を唱える4人の女性詩人たち、先住民族のマプチェ女性として初めて重要な政治的地位についてエリサ・ロンコンなど、多くの女性たちへのインタビューと、グスマン監督自身のナレーションが観客に寄り添い、革命の瞬間に立ち会っているかのような体験に我々を誘う。

資料⑩ 第78回憲法を考える映画の会 報告（1）



第77回憲法を考える映画の会は、2024年10月14日、文京区民センターで行われました。

『琉球弧を戦場にすな』の映画を見て、藤本幸久監督のお話を聞いて、その感想を話し合いました。

藤本さんのお話の中で『One Shot One Kill』という藤本さんが作られた米海兵隊の新兵訓練所での訓練を描いた作品の一部を上映しました。米海兵隊の新兵訓練所での訓練を描いたものですが、衝撃的でした。18～19の若者をどのようにして人殺しができるようにさせるかの映像です。

藤本監督の話：『One Shot One Kill』を撮影するためにアメリカの国防総省に許可を取りに行ったとき、はじめ3日間とされた。「それでは米軍とこれから一緒にやっつこう日本人に納得させるためには無理だ」と言ったところ30日間の取材許可がおりた。そこでは、上官が「敵を殺せ」と言ったら即座に殺せるようになるための訓練が行われていた。いま、自衛隊員も、日本の若者も米軍から訓練を受けているという。沖縄や横須賀、横田などでも頻発する婦女暴行事件の要因にはそうした人を殺すための訓練がある。海兵隊の任務を終えた若者達に未来がない荒んでいる状況もある。何とかしてそうした状況を変えられないか。そうした中で、イラク、アフガンでの戦争でも人を殺すことを拒否した兵士がいた。殺し合うことを拒否して欲しい。沖縄の沖縄の自衛隊の若者にも、「殺し、殺される」ことのないように、自衛隊員自身に伝えていきたい。

資料⑩ 第78回憲法を考える映画の会『琉球弧を戦場にすな』(2024/10/14) 参加者感想から (要約で失礼します)

■ 与那国町長は日本会議の集会で9条2項を否定する発言を行った。エマニエル大使は軍産共同体の手先で、日本政府に武器や装備を買えと強要する役割ではないか。また宮古島の県議会選挙で保守が2議席を占めたのは自衛隊関係者票1000人が投票したからではないか。戦争を運び込んだ人が地方自治を変えてしまっている。(M.T.)

■ ガザの虐殺を止めるようにアメリカ大使宛てに葉書を書いた。エマニエル大使はユダヤ系アメリカ人なのは。アメリカは日本にユダヤ系のパワーを送り込んでいる。(K.F.)

■ 那覇の避難訓練の様子は屈辱的。唯々諾々と従っていく日本人。自衛隊員に対しても戦争に行く、人を殺すことを拒否することを働きかけていきたい。武田美通という造形作家の「戦死者たちからのメッセージ」という彫刻展を沖縄でも開いた。自衛隊員にも見て欲しい。(S.N.)

■ 兵器の搬入を体を張って阻止しようとしている人たち。しかしそうした人を孤立させてしまっている日本の政治状況。今回の映画では婦女暴行の起きる構造的要因がどこになるのか、教えていただいた。兵士の方からアプローチして「殺すな!」と言うアピールを作りたい。連帯してがんばりたい。(M.N.)

■ 自民党政治をなんとか変えて、戦争しないようにと、政党、政治家の落選運動をしている。

■ 安倍、麻生の言っている「台湾有事は日本の有事」というのは、台湾の人にとって侮辱だ、ゲーリングの言っている「軍備拡張は簡単だ。『攻めてきたらどうするんだ』と脅せばいい」と同じ論理。日本は戦争ができない国であることを中国にも言うべき。それが日中友好だ。(T.I.)

■ 「ヤマトンチューとして沖縄と連帯する」運動を始めて15年。15000人が賛同している。軍事化が進められていることに東京では無頓着。そのリアリティーを国民がもっていない。きょうの映画と一緒に見て、もっと多くの人と認識を広げていくのが平和運動。

■ 大学の9条の会として東経大、外語大、法政大、和光大で上映会をやって、学生とともにガザやウクライナや沖縄のことをちゃんと考えられるようにしたい。マスコミのいたらくを感じるが、それでもメディアの中で発信しようとしている人がいる。若い人に伝えるっていうことだけでなく、一緒にがんばれって言うことだと思います。(Y.I.)

■ 「非戦行脚」を全国701箇所で行ってきた。沖縄の人に救われた。沖縄の人は戦争はイヤだって言うことが体に染みついているからだろうか。具志堅さんの話のところでは涙してしまった。(S.K.)

■ 神奈川も基地県。婦女暴行事件の裁判を支援している。辺野古反対のことも、目にしていないと忘れてしまっている。今回映画を見てあらためて沖縄のことを考えた。人殺し訓練をしていることにぞっとした。日本は戦争できない国であることを誇るべきだ。(K.O.)

■ 沖縄の選挙でオール沖縄の連敗。玉城県政のねじれ現象をどのようにみるか。(M.T.)



藤本監督：具志堅さんの遺骨発掘の現場を10年前から撮影していて私も涙が出てしまう。

20万人の人々が亡くなっている沖縄戦の思いが、具志堅さんや新基地に反対する沖縄の人々の中にあることが明らかだ。

具志堅さんは座り込みをして、「これは憲法に保障された『表現の自由』なのだ。だから規制を拒否します」と訴えている。「私たちが守ろうとしているのは、みなさんの家族を守るために闘っているんですよ」と具志堅さんは語り続けます。やはりこう言う人たちの思いを私たちは心に深く刻んで、今の状況がどうなっているのか、考えて行くべきじゃないのかなあと考えております。

【参加票に寄せられた感想など】

●アメリカと体制を組み、実習を行っていること自体が、日本に住む人々を脅かし、戦争への道を歩ませているのに、それを阻止する人々が少なく、ほとんどの人が無関心か、「国を守ってくれるかっこいい存在」としか見ていないかもしれないと思うと、(自分自身に対しても含めて) 憤りとともに、沖縄・琉球弧に生活の場がない私たちこそが、向き合って声を上げなければいけないと、映画を見て感じた。
その後の映像を見て、人を破壊していくような訓練、先の見えない行為が日々行われていると思うと、恐ろしさを感じた。今、学校で「平和」を教えようとする、「左寄り」だと阻止される。問題になるという話を聞いたことがあります。政治や運動を忌避し、無関心を、これ以上つくり出さないようにしていきたいと思います。(H.K.)

●。会場で発言した通りです。
○非常に良かったです。
○反対運動をもっと大きくしなければと思いました。
沖縄の反対運動を孤立させたことに反対運動をやっているものとして責任を感じます。
安保反対といえる運動を。野党を。
○日中の良心的人々の平和友好を。(M.N.)

●いつも良い映画を見せて頂きありがとうございます。(M.K.)

●今川口市でクルド人のヘイトスピーチが問題になっておりますが、昨年クルド人をテーマにした「マイスマールランド」の上映会も一つのきっかけになったものと思われまます。重い言葉の一言々をもう一度上映会の開催を希望します。
感想 愚かの一言につきる。莫大な資金と人数と自然を破壊し、抑止力のジレンマにおちいっていると思います。いざとなったらアメリカは撤退しますし、アメリカ+日本でも中国には勝てません。アメリカがシュミレーションしています。20数回。軍隊は住民を守らない。辺野古も永遠に完成しない。辺野古基地は滑走路が短くて使えないので普天間是使用し続けると、アメリカが言っています。(F.O.)

●たいへん素晴らしい映画と講演をありがとうございました。(Y.I.)

●去年からずっと観たいと思ってましたがなかなか機会がなく、(遠いなど)この度、(場所として)文京区民センターでやっていただき、ありがたく思います。
(ともだちも誘ったのですが都合が合わないなどで、だれも来れませんでした。自分でDVDを買って友人にみてもらおうと思いましたが、1ヶ月に2人みてもらえたら1年で24人にみてもらえらると思いました。)
具志堅隆松さんが理路整然と、座りこみを弾圧しようとする、警察官に対して訴える場面に、我々は、こうでなければならぬと思いました。

(FCCJでの具志堅さんの発言もほんとうに理論がはっきりしていると打たれました) 山上さん(?) (女性)のしもうた。
(たしか三上さんの映画にも映っていたと思いましたが) 山上さん始め、島の高齢のかたががんばっていることに打たれます。公共放送が報じず、新聞もほとんど報じない中、どうやってこの事実を知らせたらいいかともやややします。
藤本さんのラブ沖縄@へのご高江普天間も以前にみました。勝ちゃん、もきのうみました。(F.T.)

●強引におしすすめる戦争の準備をすすめる一方で、住民の避難計画や避難訓練はいいかげん(机上の空論の計画、手であたまをおさえてかがむというお粗末)は、東京大空襲の映画で見た、粗末な防空壕を掘って事足りりとした(そして実際は、防空壕の中でも外でも多くの犠牲者が出た)のを思い出しました。桐生悠々が言ったように、東京が空爆されるようになったら終わり、そうしてゆるさなかったのと同様に、琉球弧が戦場になった時点で終わりです。
それなのに、琉球弧をすて石にして日本が戦時的利益を得ようというのは、みにくい構図です。(N.I.)

第80回 憲法を考える映画の会

と き: 2025年3月20日(木・休) 13:30~16:30
と ころ: 文京区民センター
(地下鉄春日駅2分・後樂園駅5分) 予定

*プログラムはまだ決まっています。

憲法映画祭 2025

年1回、憲法記念の日を前にしたお休みの日に少し会場を大きくして行われてきた「憲法映画祭」、今年も昨年までと会場の同じ武蔵野公会堂で開催することが決まりました。

日時: 2025年4月29日(火・休) 10時~20時
(時間は昨年の場合です。これからプログラムによって時間が決まってくる。追ってご案内します。)
会場: 武蔵野公会堂(東京都武蔵野市吉祥寺南町1-6-22) 中央線・井の頭線下車南口2分
*プログラムについてのご意見、ご提案などもお待ちしております。

第11回 むのたけじ反戦塾

と き: 2024年2月24日(月)
13時30分~17時(13時開場)
と ころ: 文京区民センター 3C会議室

この反戦塾の議論はひとまず10回目を、これまで考えてきたことを出し合う区切りとすることにしました。
さらにその成果を出来るだけ具体的にまとめていって、私たちがこの間、考えて話し合ってきた「戦争はいらぬ、戦争をさせぬ世へ」実現に向けて、社会に発信していきけるように11回目、12回目(5月?)の反戦塾を作っていきたいと考えています。

*問合せ先: 090-4599-5314 武野
〒338-0006 さいたま市中央区八王子4-7-10-201
E-mail: dmuno@jcom.home.ne.jp

上映会案内

1月26日(日) 13時半~ カネミ油症事件(1968年)は終わっていない! 『食卓の肖像』『母と子の絆~カネミ油症の真実』コラボ上映会(文京区民センター)
2月7日(金)~2月11日(火・祝) [座・高円寺] ドキュメンタリーフェスティバル「特集 戦後80年 日々のこと」『蒼のシンフォニー』『はじけ鳳仙花~わが筑豊わが朝鮮』『マウリボリの20日間』『丸木位里 丸木俊』『沖縄より愛を込めて』『かずさ的』『夜明けへの道』『花子』『ニッポンの嘘 報道写真家 福島菊次郎90歳』『長崎の郵便配達』『Yahoo!短編ドキュメンタリー選』
ゲストセレクション部門上映作品『78年目の和解~サンダカン死の行進・遺族の軌跡』『天皇の世紀【バリ万国博覧会】【廃仏毀釈】』『リッチランド』『Appalachian Lenses』『はりぼて』(高円寺 [座・高円寺2])
*時間・プログラム未定(情報入り次第お知らせします)